

# 申酉

(再茲歌舞伎花轆)

へ申酉の 花も盛りの暑さにも負けぬ気性と見かけから へ言わずと  
知れしお祭りの なりもすつかりそこら中 行き届かせてこぶもなく  
ここでは一つあそこでは 頭かしらと立てられて 御機嫌じゃのと

町内の 家ぬし方も夕日影 へ風も嬉しく戻り道

へモシ皆さんもご苦労でござりやす こんなかで受けさせるじゃ

ねえが ほんの事だが聞いてくんねえ

へじたい去年の山帰り 言うは今更過ぎし秋 へ初の一座の連れのうち  
ち面白そうな口合いに 好いたが因果好かれたも 心に二つはないわ  
いな へその時あいつが口癖に へあきらめて何のかのとありやただの人  
あか凡夫のわれ／＼なりやこそ 滅法界に迷いやす へお手が鳴る  
から銚子の代わり目と上つて見たれば お客が三人庄屋ほん／＼狐  
拳 へとぼけた色ではないかいな へよい／＼よいやな へよい／＼よい  
やな へやあれよいこえかけろエー へ引けやひけ 引くものにとりて  
は 花に霞よ子の日の小松 初会の盃馴染みの煙草盆 お洒落娘の  
袖袂したばの履物 内裏女郎のお召物 座頭のまわしあやめに大根  
御神木のしめ縄 へ又も引くものは色々ござる 湯元細工のけん  
玉ぶり そ様故なら心の文を 示し参らせ候べくの へ人形筆売りこ  
の首を長く出したり縮めたり 何とのろいじゃあるまいか へ実にも  
上なき獅子王の 万歳千秋限りなく 尽きせぬ獅子の座頭と お  
江戸の恵みぞありがたき。